

[illegible]

一郡に依然として古墳を築造し、維持している在地集団によって為されていることで、となると建立動機は自発的とするよりも外から、上からの力に依るものとせざるを得ない。あらためて、歴史の表面、安曇連と天皇家の関係を考える必要がある。

蘇我氏に依倚し、次いで大王家と結び付いて中央政界に復帰した安曇連は天智の親百済外交に便乗、斉明七(六六二)年に阿曇比羅夫連は百済救援に出兵、そして天智二(六六三)年に白村江で大敗。動員された四万二千の兵のうちには安曇郡出自者が相当に居た筈である。敗戦で大量の百済遺民が天智四年に四〇〇、五年に二〇〇〇、八年に七〇〇〇人が近江国に入植しているが亡命の民はこれだけではない。天智一〇(六七二)年に郭務儋は二〇〇〇人を送還してきている⁽¹⁶⁾。

その翌年が壬申(六七二)年である。激しい動きの中の安曇連は正史上には記されていないが変り身のうまさで天武持統朝を泳ぎきったといふべきだろう。

天武の仏教政策は中央集権国家建設に向っての一環で舒明一一年勅願の大官大寺の建立、皇后の病氣平癒を祈つての薬師寺の建立、天武一四(六八五)年三月には諸国の家毎に仏舎をつくり仏像と経を置き礼拝供養せよとの詔を出している。経は鎮護国家の金光明経・仁王経だろう。

専制君主の政策に安曇連の部民集団によってつくられた安曇郡は直ちに反応する。体制側から見た場合、白村江の敗戦を体験している集団による郡と云うことで特別視されたかとも思われる。

壬申の乱に勝利した天武は人心の掌握に努めている。神祇尊重政策はその表われの一つだが外に出て高度な文明の洗礼を受けた集団に対しては仏教保護政策が有効である。

安曇郡内には百済難民や後に送還された捕虜が居た。彼等の存在を示す史料はないが、七世紀後半、東国には未だしであった寺院が早や早やと安曇郡に建立されたのが唯一の証左となる。

註

(1) 岩崎卓也・松尾昌彦・松村公仁「有明古墳群の再調査」信濃三五―

一一、一九八三年

(2) 桐原健「古墳時代―穂高町の古墳時代様相」『穂高町誌歴史編』所収、一九九一年

(3) 三木弘・寺島俊郎・西山克己「長野県南安曇郡穂高町所在魏磯城窟古墳について」信濃三九―五、一九八七年

(4) 明科町教育委員会『潮神明宮前遺跡Ⅱ』二〇〇〇年

(5) 岡林孝作「須恵器フラスコ形長頸瓶の編年と問題点」『日本と世界の考古学』所収、一九九四年

(6) 三木弘「有明古墳群の再検討(1)」信濃四三―一二、一九九一年

(7) 原嘉藤「長野県東筑摩郡明科町明科廃寺跡について」信濃七―七、一九九五年

(8) 明科町教育委員会『明科廃寺址』、二〇〇〇年

(9) 塩川原・桜坂にある明科廃寺の創建時瓦を焼成している瓦窯址で端部に逆刺のある須恵器坏蓋が伴出している。

(10) 土屋和章「周辺遺跡及び市内の調査について」『シンポジウム明科廃寺』所収、二〇一三年

(11) 三好博喜「考古」『明科町史』所収、一九八四年

(12) 藤沢一夫「屋瓦の変遷」『世界考古学大系』4所収、一九六一年

(13) 林博通「南滋賀廃寺」『近江の古代寺院』所収、一九八九年

(14) 後藤四朗「大化前後における阿曇氏の活動」『日本歴史』二二六、一九六七年

(15) 高家郷内の上川手・北村遺跡からは主屋に庇の付いた大型建物が溝と柵で画された域内に、隣接する環濠内にも大型建物が構営されている。環濠外には一棟の掘立柱建物が蝟集し円面硯も出土している。七世紀後半から八世紀初頭に置かれる。

(16) 直木孝次郎「百済滅亡後の国際関係」『朝鮮学報』一四七、一九九三年

く先端は剣形を呈する。

三類は蓮華文の外側に弧線が配される。周縁は高く素文。

宇瓦の文様は三重の弧文と唐草文、前者の形状は無額の直線額と段額の浅額、後者は無額の蹄額、ただ第二次調査では出土しておらず混入の疑いが強い。

三好は鍔瓦一類を七世紀後半に置いており、逆刺のある須恵器坏蓋を併出している桜坂窯の調査所見がこれを補完している。

文様が付された鍔瓦と宇瓦は寺院の創建年次・築宮氏族を推察させる鍵であり、瓦当范は同系寺院間に流通・伝世されるからその線からの追求も可能である。

鍔瓦の推移は外縁の形状に表現されるとする藤沢一夫の論^⑩によれば外縁に二重圏線を繞らし高さ一センチを計る単弁八葉蓮華文は第二期類の外区重圏文広高縁、内区單子葉弁文系類に属し、これに伴う重弧文の宇瓦や一本造りの製作技法を勘案すれば滋賀・南滋賀廃寺の瓦に結びつく。南滋賀廃寺は大津宮時代(六六七～六七二年)に大津京内に川原寺式伽藍配置をとって創建されている^⑪。

建立に要した時間だがこの地にあつて最初の寺院建立という意味では大和の飛鳥寺建立と変りはない。飛鳥寺は崇峻元(五八八)年に計画が立てられ推古四(五九六)年に塔が落成し寺僧が住み始めた。銅製の丈六仏が完成したのは一四(六〇六)年で八年から一九年の歳月が流れている。

明科廃寺も完成までに十数年はかかった筈で、この間に白村江の敗戦・庚午の編籍・壬申の乱・浄御原令の発布・筑摩行宮の建設などの国家的事件が連発している。

8

七世紀後半、安曇野市域の古墳と寺院は並存している。改めてこの地域の特性を確認しておきたい。

八世紀第三四半期の安曇郡には部姓郡司が任ぜられている(天平宝字八年安曇郡主帳安曇部百鳥)。この地域の村落は内陸漁撈民で構成されており、首長を含めた村落全体が海民の管掌に当たっている安曇連氏の部民となった。

そのことで村落内の支配関係に急激な変化は生ぜず農村とは異なる漁撈民社会が

存続維持できた。安曇郡四郷中の高家・八原・前科郷は郡内河川による五〇平方キロの滞水域周縁に形成されている。その時期は横穴式石室が構築され始めた六世紀後半だろう。

寺院を建立し維持するには古墳築造に数倍する権力・財力を要する。当時の安曇郡内で最大の権力を保持しているのは郡司クラス、国造国科野は七世紀後半時の律令制施行で一〇郡に分割された。七郡の郡司は科野国造氏の一族が占めたが安曇・高井・佐久郡の郡司職は他氏に譲っている。安曇郡司は自身の権勢に加えて背后に中央の安曇連を負っている。

応神朝に全国の海人管掌を命ぜられた安曇連は履中期の失脚後永らくの雌伏を経て推古三二年に復活、蘇我氏や皇室に接近することで勢力を増し持統五年には墓誌上進を許された一八氏族中に入っている。安曇連には海人掌握の他に航海、外交の任があり外交は百済との折衝を専らとし、蘇我・皇室との関係もあつて早くから仏教への理解を持っていた。推古三二年四月に安曇連某は法頭となり孝徳朝には難波の安曇江に安曇寺は建立されていた^⑫。

安曇郡司は部姓郡司であるので郡内には安曇連に隷属している在地集団が存在している。

在地集団は郡内構築の古墳群により最低六つの支族に分れ夫れ夫れの消長を遂げながら七世紀を迎えている。

この時、穂高古墳群に係る支族は新規の古墳を築かず、既築古墳への追葬を行っているところから斜陽の途を辿っており、それに対して潮神明宮前古墳群に係る支族は新興勢力と受けとれる。

9

七世紀に入り新興の支族を核として高家郷内に新規の古墳、明科廃寺・郡衙的村落^⑬が構築されたことを推測したが、要は古墳と寺院という性格が全く異なるモニュメント建設を安曇部なる固有名を冠した在地集団が担当したことにある。寺院建立に目を当てるならば、無仏の国と呼ばれ白鳳寺院は存在しないとされてきた信濃の

横穴式石室墳だから追葬は可能だが追葬者は限られている。五支群と二基の単独墳にはそれを祀り管理する末裔がいる。穂高古墳群は七世紀中葉まで機能していた。

安曇平西縁・東縁の古墳群築造氏族は同一だろう。潮神明宮前古墳群は穂高古墳群の一支群と見做してよい。片や一世紀余の歴史があり群形成時の古墳は松本平の中にあって異彩を放っており、潮神明宮前古墳群は穂高古墳群終焉時に出現した。副葬品は金掘塚・狐塚三号墳・上原古墳に追葬されたと同じフラスコ形提瓶・長頸瓶・平瓶だが八号墳は周湟を巡らした径一五・二〇メートルの墳丘、石室幅は一・三メートルを計る。七号墳は方形墳かもしれない。

5

明科廃寺址は昭和二八年に明科字石堂で発見された。住宅改築で布目瓦片六〇三点が出土し、うちに五点の鎧瓦、二点の宇瓦・一点の鴟尾、九点の瓦塔片が含まれていたところから史料には記載のない古代寺院址と認識され遺跡名は小字名ではなく表記の名称となった。^⑦

四六年が経過した平成一一年、宅地の再度改築で南北一二〇、東西九〇メートルの範囲が除土され南北方向に四棟の建物址と道路址が露呈、多量の丸瓦・平瓦片が出土した。鎧瓦片は一二、宇瓦片は三点で、一類とした素弁八葉蓮華文の鎧瓦は第一建物址のP4・P12、二類とした素弁一二葉蓮華文は第二建物址のP15(又はP11)から発見されている。^⑧

前後するが平成九年には犀川の対岸で明科廃寺当初の瓦を焼成したとされる桜坂瓦窯址が調査されている。^⑨

廃寺に近い栄町遺跡では七号住居上層出土の坏蓋中より宝珠形の摘みを付けた逆刺ある数点を検出。塔の原の上手屋敷二次調査では方形の掘り方をもち柱間二メートルを計る五間×四間の大型建物址を露呈している。^⑩

6

平成一一年の調査域は中樞を外れた東辺で、検出された第一建物址は西に雨落ち

の溝を具えた桁行五間、梁間二間(三間になる可能性もあり)の規模(五×二メートル)で、径・深さ二メートル前後の円形プラン柱穴一三箇が梁間二・五、桁行四・五メートルの柱間で穿たれている。

第二建物址は第一建物址の一層下に一辺三メートル弱の掘り方を設け中に径四〇センチ前後の丸柱を建てている。規模は二間二間(一一・五メートル)の総柱だが桁を北に延ばして五間とする復元もされている。柱間は一号址より広く五・五メートルを計る。

一二号建物址の北一二メートルに幅一メートル、深さ六〇センチの布掘りがコの字形に巡って黒土が充填、上面から柱穴七ヶが検出されて梁間二間(五メートル)、桁行それ以上の三号建物址となった。柱穴は径七〇センチの円形で総てに径四〇センチの木柱が残存、柱間は二・五メートル。布掘りで画された内区は整地のみで地業の痕跡はない。方形の掘り方はP61を布掘りが切っているので前後は判る。

7

寺院の創立時を示す痕跡は遺構からは窺われなかった。出土土器は体部が直線的に開く土師器坏・内黒坏、扁平な摘みを付け口縁端部を折り曲げた須恵器の坏蓋で八世紀末から九世紀初頭と時期は下る。

結局は瓦、それも一七点の鎧瓦と五点の宇瓦だけとなる。

古代にあって、瓦で葺かれた寺院は最低でも塔と金堂を保有していた。明科廃寺は丸瓦・平瓦の多量出土から全瓦葺きと目してよい。金堂の大棟を飾っていただろう鴟尾の破片も出土している。

三好博喜は鎧瓦を三類に分けている。^⑪一類、瓦当の径は二三・三、外縁には二重の圏線が巡り高さは一センチ。内区主文は素弁八葉蓮華文で中房は小さく蓮子は一プラス八、中房から発する稜線で区切られている蓮弁は中央に鎬が走り先端はやや尖る。瓦当接手法は一本造り。

二類の主文は細素弁一二葉蓮華文で瓦当の径は一類より一廻り大きい。中房も大きく一プラス八プラス一二の蓮子が付されている。間弁の稜線は無くなり蓮弁は長

に比すると中辺のそれはやや小さい。石室形状を箱状と記しているものが五基もある。

B支群よりの分派とも見られるC群五基は富士尾沢の奥処に分布している。石室の規模により二群に分けられる。やや小型のC2号墳からは直刀・鉄鏃・刀子と美濃須衛窯の須恵器が出土して追葬はされていた。

E群は川窪沢川と烏川で画された「牧」の台地上に現在七基が知られている。

F支群と上原古墳(G1号)は烏川を堺とする旧西穂高村に所在する。

上原古墳は烏川により分岐している穂高沢の左岸、F支群は柏原沢右岸に縦列している一〇基で、これら縦塚の末端は鳥趾状に分れ、矢原・白金・等々力に三〇から七〇センチの耕土域を形成した後に万水川に入っている。一〇基の古墳だが上流に位置する古墳は大きく下流の古墳は概して小さい。矢原・白金・等々力は古墳後期からの集落址でもある。

2

穂高古墳群に対する東縁の旧東川手潮の神明宮前には九基からなる古墳群が築造されている。1号墳(金山塚)は早く発掘され直刀・轡・須恵器の出土が報ぜられている。八号墳は平成一七年の調査で周湟の巡る推定径一五メートルの円墳。内部主体は横穴式石室で羨道部はやや幅を狭めている。幅は一・三、現存長は五メートル。石室内と周湟からは刀子片・鉄鏃・耳環各一、勾玉二・切子玉一、丸玉二・白玉六・小玉一〇四顆、須恵器は坏蓋各五、平瓶・フラスコ形提瓶各四、甕・長頸瓶各二、横瓶一点が出土。³七号墳は径二〇メートルを計り隅丸方形プランで幅五メートルの周湟を繞らす。陸橋は北東隅に設けられていて湟中より長頸瓶が出土している。

3

立地が異なる二つの古墳群に共通している点は終焉の時期が同一であることで、フラスコ形提瓶と長頸瓶が指標となる。

フラスコ形提瓶は轆轤で挽き上げた球体に口縁に特徴ある頸部を嵌入した器形で

把手は付されていない。かかる須恵器は七世紀代に湖西窯で生産され東は東海・関東・東北地方まで分布している。頸部の狭長と口縁に凹みある縁帯と直下に断面三角形の突帯を繞らすをもって特徴とするが、やがて頸部は太く短かく口縁の縁帯は幅を広げ突帯は消滅する。⁵

長頸瓶には素縁と端面をもつものの二種があり、前者には透し孔のある台付から亀甲状に盛り上った肩部が低平化し稜線を強く示すまでの経過がある。端面をもつ後者に台付はなく肩部は甲張り状から低平に変わりつつある。肩部を同じくする平瓶や幅広い縁帯を繞らすフラスコ形提瓶と並存する。

その須恵器は穂高古墳群にあつては各支群の草分けの古墳に追葬副葬品として存在する。

長頸瓶はB支群の金掘塚、E群の狐塚三号墳、F群の九号墳と上原古墳、フラスコ形提瓶は魏磯城窟、B群の金掘塚と祝塚付近古墳出土である有明神社収蔵品、E群の狐塚三号墳⁶、なお、これとセットを為す坏蓋・坏身・把手を有する平瓶・小型甕がA群の八号墳、B群の有明神社蔵品、E群の狐塚三号墳、F群に含まれる上原古墳から出土している。

4

相違点は古墳群の成立時期にある。穂高古墳群の特質は先行する古墳のない地域に六世紀後半突如として規模形状の整った横穴式石室内蔵円墳が出現したこと、副葬された金銅製品中に優品の見られることである。

単独墳や各支群の上流地域築造古墳の石室はいづれも規模大きく、側壁は大型石塊の乱れ積、奥壁に鏡石は用いられていない。副葬品のセットで、直刀の中には金銅装の儀刀が混り、馬具中には金銅張りの鏡板・杏葉・雲珠・留金具などの飾り馬具、装身具では金環、玉類は勾玉・管玉・切子玉主体の構成。

各支群は以後一世紀余に互り下流域にまで範囲を広げていくが、新規古墳は墳丘・石室共に縮小しており副葬品を欠く古墳も多い。七世紀に入ると古墳の築造は止り、上流域の既築古墳への追葬へと変る。そのことは既述した。

附編 安曇郡に観る古墳と寺院

桐原 健

古墳築造が止んで寺院建立に移るとは夙に定説化している現象で、転換期は六世紀の第Ⅳ四半期、畿内にあつては前方後円墳の終焉をもって目安としている。

天皇陵では敏達陵が最後の前方後円墳で、彼の没年は敏達一四乙巳(五八五)年、敏達は仏法を受け付けなかったが一二年に蘇我馬子は石川の宅に仏殿を設けており、次代の用明二年には仏教受容の可否をめぐる闘争が起っている。

前方後円墳消滅後の一世紀は古墳と寺院が並存している終末期で政治面では仏教受容派が勝利を納め、親百濟派が中央集権体制の確立を図ったのクーデターが成功した時期と重なる。

一見して古墳から寺院への転換動機には政治性が強く、事実、仏教公伝後八六年の推古三二年(六二四)には四六寺、更に六六年後の持統四年(六九〇)には五四五寺と云う飛躍的な数字には政治色濃厚な上からの工作が思われる。

しかし、ことは精神生活に係り、転換動機を政治性だけに限るのは難しい。白鳳期、伊勢・尾張・美濃までは一郡に数寺の建立があるも以東には見られず、美濃東隣の信濃では延喜の頃でも信貴山の命運をして「無仏世界のような所にかし」と云わしめている。

拙稿にはその意もあつて信濃を場とし、古墳と寺院の関係を窺ってみようとする。安曇郡に恰好な資料がある。

旧南安曇郡の大分と旧東筑摩郡の一部を合わせて平成一七(二〇〇五)年に安曇野市が発足した。市域の西縁には穂高古墳群、東縁には潮神明宮前古墳群と明科廃寺が存在している。

1

市域西縁に立地する穂高古墳群は五支群と単独墳二基の六四基から成っている。

且つては一〇〇基を超えていたらしい⁽¹⁾。

支群名は北より付されている。旧有明村の宮城地区にあるA支群(8基)は中房川から分岐している油川左岸に添っていて最高処にある陵塚と六〇〇メートルの間隔を置く下流の一群とに分けられる。大正六年の分布図によると陵塚の他に一基、犬養塚や県塚がある後者は一五基から成っている。

油川は自然流で東流して乳川に合する。取入口である大土井地籍にはプロト有明山社が奉祀され、末端部の矢村・新屋・古厩・耳塚の耕土は三〇から七〇センチと厚い。耳塚地籍からは古墳後期の土師器出土がある⁽²⁾。

A支群よりやや離れて単独墳の魏磯城窟(D1号)がある。巨石下の間隙を片袖の横穴式石室に利用していて鳥居龍蔵はドルメン式古墳の名称を与えている。窟内の三面は板石で囲まれ、飯田の石室D類の範疇にも含まれる⁽³⁾。

早くから開口して残存遺物は少ないが金環・留金具破片、須恵器では臙の口縁部・フラスコ形提瓶、高坏の破片がある。

油川の南一・五キロメートルに天満沢、更に一キロメートル離れて富士尾沢が東流して乳川に合流している。

B支群は天満沢筋の三二基で、左岸奥処に四、連塚から林道に添って縦列八、沢より四基が存する。最奥のうちの一基がぢいが塚で右壁には天然の磐石が用いられている。そこに所在する磐石によって古墳の位置、石室の構造が決められたと云う次第だが省力型古墳とも思われる。連塚との間隔は四〇〇メートルでA支群の陵塚と犬養塚のそれと類似している。林道添いの縦列八基については下流に位置する程に墳丘・石室規模の縮小していく様が見える。

右岸の別荘地域には一六基が広がりをもって分布している。位置により、上(四基)・中(七基)・下(五基)辺に分けると上・下辺の墳丘・石室はやや大きく、それ